國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

〔研究ノート〕オオカミの護符の作成者について：埼玉県岩根神社と釜山神社を事例にして

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2025-07-24 キーワード (Ja): 宗教民俗, 護符, 版木, 教派神道, オオカミ信仰 キーワード (En): 作成者: 矢嶋, 正幸 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001743

〔研究ノート〕

オオカミの護符の作成者について

～埼玉県岩根神社と釜山神社を事例にして～

矢嶋正幸

一　はじめに―護符研究について―

護符とは、お札・お守・守札・神札などと呼ばれ、神仏の尊称や経文、呪文、呪的な文様が書かれたものを指す。体に身に付けたり、屋内では神棚や竈、屋外では辻や水口などに設置することで、神仏の加護を願う。材質は、紙や木等からなるが、ただ「お札」と呼ぶときには、紙であることが多い。製作される部数によって、手書き、版木印刷、機械印刷と製作手段が異なる。大きな寺社などでは、機械印刷されたものが主となっているが、特別な行事などでは今でも版木で摺ったものを授与することもある。

さて、戦前から護符に関する研究がなされているが、[1] 民俗学による本格的な護符研究は、昭和六二年（一九八七）に「護符と幣帛」特集号とされた『民具マンスリー（二〇）七』から始まる。[2] 本号で、戸川安章は出羽三山という護符の発行元を取り上げ、西海賢二は神奈川県秦野市の個人宅の屋根裏に納められていた護符を整理し需要面からの分析をおこなった。この護符を巡る、発行と需要という二つのアプローチについては、後年、嶋津宣史が「日本の護符の信仰を探るには、護符を授与する社

寺側の信仰はもちろんのこと、授与される側の信仰も探求しなければならない」と述べていることに通じる。[3]

それからおよそ四〇年が経過して、近年は需要側の資料が蓄積されつつある。埼玉県を例にすると、平成八年（一九九六）に宮代町が発行した『祈りの札』[4]が一つの画期となっている。本書以前にも青木忠雄による旧与野市内の調査[5]や、鳩ケ谷市教育委員会による社寺札の調査[6]がなされていた。しかし、宮代町では、護符を一枚ずつ翻刻し、図柄のあるものについては図版を掲載した。さらに、授与元が分かる寺社についてはリストと分布図の作成をおこない、護符の発行圏を明らかにした。これは一冊を護符の調査報告に充てるという潤沢なページ数を確保したからなし得たことであり、平成二六年（二〇一四）の『飯能市郷土館収蔵資料目録六　護符・版木など』[7]や令和二年（二〇二〇）の『北本の守り札』[8]といった後発する調査報告書の手本となっている。また県外では、徳島県立博物館の企画展「徳島おふだコレクション～はらいたまえきよめたまえ～」[9]で参考文献にあげられている。

このように自治体による調査報告書発行や、博物館による展示が全国的に盛んにおこなわれるようになっているものの、護符研究の総括的な仕事は、平成一六（二〇〇四）に千々和到が主宰した国際シンポジウム「護符・牛玉宝印研究の現状と課題」をもとにした論集『日本の護符文化』が最初で最後となっている。千々和は「護符の収集的研究を実施することが必要」[10]と述べているが、これまでにどれだけの調査報告が蓄積されているのか、さらにその蓄積をどのように生かしていけるのか、点検していく時期に来ていると思われる。

さて、このような需要のされ方と比べて、発行に焦点を当てた調査・研究は蓄積途上となっている。『日本の護符文化』では、配札という職能や、版木そのものに焦点が当たっているものの、版木の作り方や摺り方についての論考は少ない。元興寺文化財研究所による奈良の寺社に伝わる版木調査[11]は、分厚いものがあるが、「モノ」としての版木に焦点が当てられており、その作成者や使い方については、あまり焦点が当てられていない。また、民俗行事として牛王宝印などを発行する「おこない」の調査報告[12]では、護符作成について触れられることはあるものの、あくまで報告にとどまっている。

戸川は先にあげた論考の中で、「道者や信者の要望に応じて多くの守札を発行したが、それを摺るために用いる版木類は、職人に彫らせるものはごく稀れで、そのほとんどは、修験者自身であった」[13]と、版木の作成者について述べているが、果たし

てこの事例を一般化してよいものか。

また、西海賢二は、先のシンポジウムの中で護符発行の主体は御師であることに注意を投げかけている。[14] 確かに近世の寺社で発行された護符には、御師の名前が印字されたものもあり、その指摘は首肯できる。

しかし、護符の作成に携わるのは、修験者や御師といった宗教者だけなのだろうか。御師は、多い時には数千枚の護符を配ることもあるが、そうした膨大な数の札を個人で作れるのかという素朴な疑問もわく。護符作成に手伝いがいるとしたら、どのような人間が携わってきたのだろうか。

地域や時代ごとの護符発行の仕組みの事例を収集することで、護符や、それを取り巻く宗教環境といったものへの理解を深めることができるだろう。それは、護符需要への理解にもつながることでもある。

二　オオカミの護符について

さて、様々な護符がある中、本稿ではオオカミの護符を取り上げる。小倉美恵子『オオカミの護符』[15]は、ドキュメンタリー映画をもとに執筆されたもので、東京都武州御嶽神社で発行されているオオカミの護符を皮切りに、関東各地でおこなわれているオオカミ信仰を紹介している。松場正敏は、護符コレクターの立場からオオカミの護符を収集、『お犬様の御札～狼・神狗・御眷属～』[16]という同人誌を作成し、第三版まで発行している。ネット上を見てみると、オオカミの護符を集める様子がＳＮＳや動画にあがっている。近代に絶滅したオオカミという動物が持つ神秘性とともに護符のデザインの秀逸さに惹かれる人も多いようだ。

もちろん民俗学の立場からもオオカミ信仰への関心は高い。オオカミ信仰は、東北地方から中国地方にかけて分布しているが、オオカミの護符を発行している神社は、埼玉県秩父地方に集中している。秩父地方を中心としたオオカミ信仰の概説については、飯塚好がまとめている。[17] また、個別研究としては、西村敏也が、三峰山を筆頭にして、武甲山・猪狩神社・釜山神社・城峰神社（矢納）・城峰神社（石間）・宝登山神社・蓑山神社・若神子神社・檜原村といった神社を取り上げ、その中で護符の作成にも注意を寄せている。[18] 埼玉県立川の博物館でも「神になったオオカミ」という展示をおこない、県内にあるオオカミ信仰を持つ神社を一覧で紹介した。[19] こうした神社では、春秋の祭りでオイヌガエ（御狗替）などという護符の発行と頒布が主要な

行事となっている。

松場は前掲書中で、七六ヶ所の神社から発行されたオオカミの護符を紹介しているが、描かれているオオカミの姿は一枚一枚異なっており見ていて飽きない。どうしてこのような異なるデザインが生まれてくるのだろうか。

本稿では、岩根神社と釜山神社という二つの神社から発行された護符を取り上げることにする。両社は明治一〇年代後半から二〇年代前半にかけてオオカミの護符の発行を開始している。両社ともに、持田鹿之助という版木作成者が携わっており、同一の視点でそれぞれの神社で護符が発行されるまでの経緯を観察できる。持田が書き残した日記[20]から、護符の作成には、どのような人間が関与しており、またその人間関係が護符のデザインにどのような影響を与えうるのか、考えていきたい。

三―一　岩根神社と釜山神社の護符

埼玉県長瀞町井戸の岩根神社は、春のお祭りでオイヌガエがおこなわれて、オオカミの護符の発行をおこなっていた。現在は無住であるため、護符の授与は、宝登山神社が委託でおこなっている。オオカミの護符は、一頭のものと向かい合わせになっ

岩根神社（小札）（平成29年採集：埼玉県立川の博物館蔵）

岩根神社（大札）（岩根神社蔵）

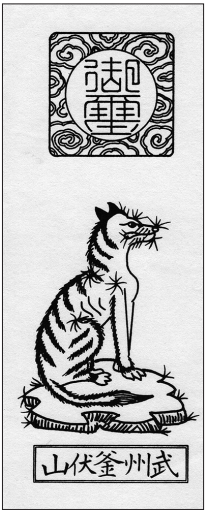
両神神社（平成29年採集：埼玉県立川の博物館蔵）

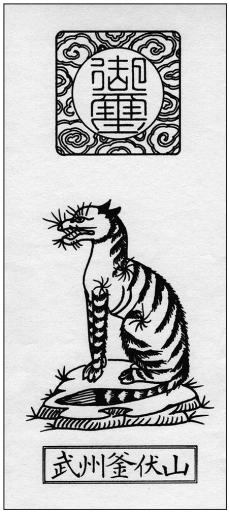
宝登山神社（平成29年採集：埼玉県立川の博物館蔵）

た二頭のものの二種類がある。一般に頒布されているものは、機械印刷された二頭立てのものである。一頭のものは、版木で摺られたもので掛け軸のような形で頒布されたようだ。下部に書かれた白鳥村は、明治二二年（一八八九）から昭和一八年（一九四三）に存在していた村名で、その間に作られた版木を使用したと思われる。

一頭のものは耳が垂れ、長い尻尾を前に置き、脇腹にはあばらが浮き出、後ろを振り向いた姿勢を取る。このような姿は、近隣の宝登山神社ではなく、より遠方の奥秩父にある両神山周辺の神社（両神神社・猪狩神社・龍頭神社）で発行されるものとよく似ている。

また一方の釜山神社は、埼玉県寄居町風布にある。かつては講が形成されてオイヌガエがおこなわれていたが、コロナ禍前後に講は解散となり、希望者に護符を授ける形になっている。ここでも一頭と二頭の護符がある。二頭のものは、二枚に一頭ずつ機械印刷されている。一頭のものは、版木で摺られたもので「新田大炊介義重廿五世源俊純筆」とある。源俊純は、新田氏の末裔にあたる岩松俊純のことで、江戸時代は本貫地である上野国岩松に所領を持ち交代寄合を務めた。歴代の岩松氏は絵を得意とおり、特に猫絵はネズミ除けのご利益があるとされて、





釜山神社（小札）
（平成29年採集：埼玉県立川の博物館蔵）

釜山神社（掛軸）
（釜山神社蔵）

養蚕農家からの人気が高かった。釜山神社の宮司である岩松氏とは、祖先を同じくし、江戸時代から交流があった。このオオカミの絵もそうした関係から下絵が提供されたとも考えられる。一頭のものは、耳を立てて、背筋を伸ばした姿をしている。二頭のものは、だいぶ簡略化した絵柄になっているものの、耳や毛皮の感じから、一頭立てのものを参考にして作成されたものと考えたい。

三―二　持田鹿之助について

持田鹿之助は、天保九年（一八三八）に長瀞町井戸に生まれた。農林業を主としつつ、彫刻・蚕種製造・舟車運用など複数の生業を持っていた。日記を書き始めたのは、四二歳の明治十二年（一八七九）からで、死の前年となる明治三十九年（一九〇六）までの二七年間に渡ってほぼ毎日筆を取っている。持田は、強い好奇心を持って、近隣で起きた出来事から国際情勢まで、見聞きしたことを細かに日記に記した。また、手先も器用であり、護符の版木のみならず、石燈篭や墓石、印章の彫刻なども手掛けた。書画も堪能で、神社境内を飾る行燈絵なども描いている。

版木作成についての初出は、明治一三年（一八八〇）二月九日で、蚕絵を彫っている。上部に「掛巻母蠶の神を祈りなば恵茂厚き新玉のまゆ」と自作の和歌を讃とし、下部には「キヌカサ大神ノ姿」を描いたものだった。

岩根神社などで版木作成を依頼されたのは、こうした職人としての実績が周囲から評価されていたためだろう。

四―一　岩根神社とオオカミ信仰の始まり

岩根神社は、長瀞町井戸に所在する。オオカミ信仰で有名な宝登山神社からは、荒川を挟んだ対岸に位置している。社名のとおり、大きな岩を社殿の裏に抱えた山岳信仰の神社である。

神社境内には、多くの石造物や奉納品が存在しているが、これらは、御嶽教、大口真神、産泰の三つの信仰からなっている。[21] また、長沢利明と金井塚正道も、岩根神社の奉納物の豊富さを取り上げて「当社に寄せられた、最盛期における庶民信仰の並々ならぬエネルギーを感じ取ることができる」と述べているが、[22] 石造物が奉納された年代を見てみると、明治後半が主となっており、信仰のピークがこの辺りであったことを示している。

近世にさかのぼると、『新編武蔵国風土記稿』に「山神社」

とあるのが、岩根神社の前身で、磯部家が個人持ちとしていた。[23]「山神社」が「岩根神社」に変わる経緯について、『持田日記』を参考に見ていきたい。

持田鹿之助が岩根神社と直接結びつくようになったのは、明治一八年（一八八五）六月一日からである。

磯染来りて大麻生ノ講元ノ名面ニて氏神ノ山神ヲ巖根山巖根神社ト禰シテ御犬ヲ貸積りニて、寶山ヨリ御犬ノ姿ヲ受テ参りタルガ明日中ニ御犬ノ姿ハ間合まいが火除盗賊除ト中符は大己貴神、大山祇神、天岩戸開神トテ御眷属ト札判ヲホリテ貰ひ度ト云ニ付、夫ヨリ始ル。

山神社の磯部染吉が、大麻生の講元を名面にして、オイヌガエをしたいと言ってきた。そして宝登山の御犬の姿を参考にするなどして、各種護符の判木を彫って欲しいと依頼をしてきた。磯部染吉は、鹿之助と同じく井戸の住人で、御嶽教の行者でもあった。大麻生の講元というのは、松本という人物で、明治一七年（一八八四）九月一九日には、染吉のもとで御座を立てており鹿之助も病気についての託宣を受けている。さらに、寄居町保田原の波羅伊門神社境内に立つ明治一七年（一八八四）一二月の「御嶽大神」石碑には、「神道御嶽教全国講社結聚係大里郡大麻生村　丸尾講元　松本定吉」の名とともに「秩父郡井戸村　副社長　磯部染吉」と彫られている。埼玉県北部には、持田と松本の名前が並んだ御嶽教関連の石碑がいくつか見られる。[24]染吉を中心とした御嶽教の繋がりの中からオイヌガエをおこないたいという動きが出てきたものらしい。

早速翌日の六月二日に「中符、火除巖根山、盗賊除巖根山、御眷属」の版木を作成。その翌日に染吉へ手渡した。

六月一七日には、「夜ニ入りテ坂本村の畝定五郎来り、御犬ヲ一疋持て来て貸キトーヲシテ泊り。」と、早くも護符を発行している。

こうして始まった岩根神社のオオカミ信仰であるが、本格的な祭礼行事がおこなわれるようになったのは、明治二〇年（一八八七）からからである。

明治二〇年（一八八七）二月一一日に、持田は、オイヌの札の代金十銭をもって、磯田の所へオイヌガエの手伝いに行ったところ、日が延びたということで帰宅した。それから二ヶ月経った四月一〇日に磯田から新たな版木の作成と「保田原ヨリ巖根山へ太々ヲ奉納致度」という依頼を告げられた。保田原とは、保田原在住の保泉某のことで、大麻生の松本定吉の信者でも

あった。

朝作リニ水汲箱印ヲ三ツ書、夫より上葉原ノ磯染方へ行御犬貸ノ帳場ヲ、大麻生ノ松本ト保田原ノ保泉トスル。巌根山ニ太々アリ、講中も大ニ来る。

果たして、四月三〇日（旧暦四月八日）の祭礼当日には、持田・松本・保泉がオイヌガエの帳場に入って手伝いをしている。太々神楽も奉納されているが、これは皆野からの神楽だった。持田は、隣村の白鳥神社にも皆野の神楽を呼んでいることから、近隣の神社関係者からは神楽師との折衝役を任されていたようである。

明治二二年（一八八九）の末には、持田は、磯部から縁起の作成を依頼されている。これに先立つ明治一九年（一八八六）末に、磯部は、「イワネ神社ノ口碑ヲ持てクル。」と、岩根神社の縁起について話を持ち掛けている。また、明治二三年（一九〇〇）一月一四日には、縁起の本を磯部に返却していることから、この依頼は、縁起書の文面ではなく、版木の作成依頼だったと推測される。

さて、こうして始まった岩根神社のオオカミ信仰は成功を収め、明治二三年（一九〇〇）には、社殿の普請をおこなうまでになった。

四―二　小括

岩根神社は、磯部染吉の個人持ちの神社であることから、磯部の個人的な付き合いを中心に、手伝いが来ていた。そしてそれは御嶽教のネットワークが深く関係していた。

オイヌガエをおこなうことについては、大麻生村の松本定吉が発起人だったようである。持田は、版木の作成、護符の摺り、祭典での受付、祭典外での護符授与を担当した。

当初は、寶山（宝登山）の札を参考にして護符の作成がおこなわれたようであるが、現在伝わるものを見ると、宝登山ではなく、両神山周辺のものと類似性がある。両神山周辺からは、木曽御嶽山を開闢した普寛上人と、その高弟である順明上人が出た御嶽教が強い土地柄であり、磯部染吉もしばしば両神山方面に出かけている。

明治二〇年（一八八七）四月一〇日に「磯染来りて、礼判（ママ）ヲ拵へて貰ひ度ト云」とあって、新たな版木作成を依頼されている。この時に今の絵柄に切り替えられた可能性もある。また、

白鳥村発足後の明治二二年以降に版木を作り直したという記述はない。

五―一　釜山神社とオオカミ信仰の始まり

釜山神社[25]のある釜伏山は、寄居方面から秩父に入るための古い街道筋に当たる。峠には、関守を務めたという岩松信兵衛家があった。新田岩松氏の子孫で『新編武蔵風土記稿』[26]によれば、上州金山城から落ち延びて、この地に居ついたとされる。

近世の釜伏山には、釜伏蔵王権現が祀られており、峠を行き交う人々の信仰の対象となっていた。それが変わったのが神仏分離の嵐が吹き荒れた明治七、八年（一八七四、五）頃のことで、蔵王権現は「釜山大神」として名称が改められ、ふもとの姥宮神社へと合祀され、権現堂も焼失したとされる。しかし、明治一五年（一八八二）頃編纂の『武蔵国郡村誌』によれば、風布村の釜伏山の項に「頂上に日本武尊を祭り釜伏神社と称す[27]」とあって、必ずしも信仰が途絶えたわけではなかった。

明治二三年（一八九〇）に埼玉県知事に向けて「神道修成派政務支局設置」の願書を提出して、本格的な宗教活動を開始している。茂木貞純は、「これ以前に釜伏には、お狗信仰は確認できない」と述べているが[28]、それは『持田日記』によっても裏付けられる。

『持田日記』で岩松信兵衛のことが出てくるのは、明治二四年（一八九一）三月一〇日のことで、法善寺にある「岩松信兵衛ノ過去帳」を書写している。翌日、釜伏に行って、系図のことについて夜通し話をした。そのまた翌日に、平草の田島庄次郎という人物が仲介となって信兵衛への「約定書」を書いた。何の約定かは不明だが、この直後から、版木などの作成が始まっているから、そうしたことの取り決めがなされたのだと思われる。

四月一七日の祭典に合わせて、どのような下準備がなされていたのか、版木作成・護符作成・その他の三つに分けて見ていきたい。

五―二　【版木作成】

三月一二日から二四日にかけて、釜伏大神守、日本武尊・大山祇命・受母知命・大口真神の中符と、榛名大神の大札、小札、中符、御霊の版木を作成した。榛名大神については、版下を作成しているが、その他については記述がない。岩松信兵衛が、事前に版下を用意していたのだろう。

日記では、版木と実際に摺った護符の名称が対応して記述されているわけではないため、推測も交えると次のようになる。

〈版木〉　〈摺られた護符〉
釜伏大神　釜伏大神の大札
日本武尊　釜伏大神火盗除璽
大山祇命　釜伏大神ノカイ中守
受母知命　養蚕神符
大口真神　眷属札・御犬札
榛名大神　筒粥

摺りの段階で、釜伏大神と明記されているのは、「釜伏大神ノ大札」・「釜伏大神ノカイ中守」・「釜伏大神火盗除璽」の三種類がある。大札と懐中守りは、大きさによる違いだと思われる。釜伏大神の前身は、蔵王権現であることから、大山祇命＝釜伏大神であると推測される。次に三峰神社や宝登山など、近隣の日本武尊ゆかりの神社では火盗除を利益とするところが多く、また前述の『武蔵国郡村誌』[29]に釜伏山頂上に日本武尊を祭るという記述があることから、火盗除璽＝日本武尊と推測した。さらに、「養蚕神符」とあるのは、『日本書紀』で蚕の始祖とされる受母知命で、「眷属札・御犬札」などと記述されているのは、大口真神のことだろう。

筒粥は、粥で煮た竹筒を取り出して、その具合で一年の作物の出来を占う神事である。関東では、榛名山の筒粥が有名で、その結果を配札の御師が持参したり、参詣者が持ち帰るなどして農作業の参考にした。釜山神社では、筒粥神事を始めるに当たり、筒粥の本家本元と見なされていた榛名大神の名前を使う必要があったのだろう。

このように参詣者の需要を見越して、ご利益に即した複数の版木が準備された。

また、以前から保持していた版木も使われた。剣祓に折られた札は、「釜伏大神太々神楽」と刷った。この年の祭礼は、神楽殿の上棟も兼ねて、神楽奉納がおこなわれた。以前から祭礼の際には、神楽師が呼ばれていたようだ。

版木の作成代金は、一つにつき三五銭と設定していたようである。[30]明治二六年（一八九三）当時の玄米価格は一石＝七円三八銭であったから、[31]版木作成だけで食べていくことはできないものの、小遣い稼ぎとしてはそれなりの額を収入として得ていた。

五—三　【護符作成】

護符を作るには、紙を折る、版木で摺る、角判を押す、仕上げ（中符・竹芯・供物を入れる）という工程がある。

各作業は、ある程度役割分担がなされていた。摺りは持田が、角符を押すのは岩松信兵衛が、主に担当した。手伝いとして、「鉢形ノ木持ノ関根定吉ト倉林由五郎」「森田稲蔵」「田のの田ノ堂」「田ノ常」田の善」「田ノ源」といった名前が見え、折りや仕上げをおこなっている。彼らは、風布・鉢形・下田野といった近隣の住民が中心になっていた。

こうした人間は、岩松信兵衛の個人的なつながりから声がかけられていた[32]。護符作成には直接関与していないが、会計役を務めた大野福次郎は、秩父事件で風布の人々を扇動した自由党のオーガナイザーだった。岩松信兵衛も大野を保証人として自由党に入党して罰金刑を受けている。森田稲蔵も大野の誘いに乗って事件に参加した一人だった。風布村では、全村決起しているため、ほとんどの家が秩父事件に関与していた。しかし、大野は軽懲役七年六ヶ月、森田は重禁固二年六ヶ月の判決を受けており、事件では指導的立場をとった人物達だった。秩父事件の中心人物が、そのまま釜山神社のために動いていた。

護符は、中符を紙でくるみ、朱で角判を押す。神宮大麻は、麻串を剣型に包むが、釜山神社の「神楽の札」では竹串を包んでいた。日記では、折った数と刷った数が一致していないため、もしかしたら持田が記述しないところで、護符作成がおこなわれていた可能性もあるが、眷属札は七九八枚、筒粥は四〇〇枚を刷っている。参詣者の需要を見込んで、作成する枚数も調整していた。

五—四　【その他準備】

犬箱というものも作成した。三峰神社などでは、木製の「御眷属箱」を講社に貸し出している。参詣者がこれを持っていくと、中身の札を入れ替えてくれる。この年は、初回であったため三四八個の犬箱を用意した。

また、「神狗貸附簿」も作成した。どこの講がイヌを何頭借りたかを記録するためのものであるが、以前からの原簿との統合作業がおこなわれた。そこには「折原村ノ大字秋山平野亀吉」などのように、村や集落単位ではなく個人名で登録されており、いわゆる一人講が多かったことが分かる。

その他に傘の準備、襖の修理、参道や神楽殿の整備をおこなっている。

五―五　【持田の働き】

持田の働きは、版木の作成から始まり、境内の整備、名簿の整理まで、多岐にわたっていた。これは、岩根神社でのオイヌカエの成功を背景にして、いわばコンサルタントのような形で持田が頼られたということなのだろう。

持田が、釜山神社に関わったのは、この年に限られる。それは祭礼の日が、岩根神社と重なっていたためである。この年の祭礼でも、持田は岩根神社の帳場に立ってオイヌカエをおこなっている。

岩松氏との仲介者となった平草の田島庄次郎については、不明であるが、持田と岩松信兵衛には修成派を通した関係があった。神道修成派は、新田邦光が開教したいわゆる教派神道で、明治初めには御嶽教も取り込んで勢力を拡大していた。

明治二五年（一八九二）四月二日には、修成派「副館長」が岩松信兵衛宅を訪問し、持田が早くに亡くした息子を霊神とすることや、今の息子を教導職にすることなどを話題にしている。岩松信兵衛は、申請書類も修成派としての肩書で提出しており、釜山神社は修成派（御嶽教）のネットワークに組み込まれていた。

五―六　【小括】

釜山神社も、岩根神社と同じように、岩松氏の個人持ちの神社であったことから、その個人的なネットワークから人を集めて祭典を実施していた。

釜山神社では、明治二三年（一八九〇）に、修成派に所属して活動するようになるとされるが、実際にはそれ以前から講組織が存在していたと思われる。祭典をおこなうことで、およそ二五〇講だったものを三五〇講に増やす目論見があったと思われる。明治三〇年（一八九七）には二三〇人の講員がいたとされるが、釜伏講は次第に隆盛していき、大正末期には二〇〇〇人に、昭和末期には五〇〇〇人を超えるまでになった[33]。

釜山神社で、祭礼の運営に携わっていたのは、風布を中心とした地縁関係者が多かった。祭典時に掲げられる明治二七年（一八九四）謹製の幟には、大野福次郎・大野国蔵・石田造酒八・森田稲蔵という秩父事件の指導者たちの名前が並んでいる[34]。大野福次郎は、この年の春祭りの最中に亡くなったとされ、

岩松家墓所に葬られたが、墓碑には「神道修成派大世話掛大野福治郎」とある。こうした祭礼周辺に見える点描は、秩父事件での人間関係が、神道修成派と交わりながら釜山神社の運営にスライドしていったことを物語っているようでもある。

明治二三年（一八九〇）時点では、神道修正派の肩書を利用しているが、後年になると、この肩書を使用しなくなる。岩松家では、明治初年に姥宮神社に合祀されて行政上の位置づけが不明瞭となった神社を復活させようと、明治二六年（一八九三）には護良親王を祭神とする鎌倉宮御分霊が、明治三〇年（一八九七）には鎌倉二階堂にある住吉神社の移転が計画された。こうした運動で作成された書類には「発願者総代」などの肩書が使用されている。岩松氏にとって、修正派や各種神社の移転は、釜山神社再興のための方便だったと思われる。岩松氏の悲願は昭和七年（一九三二）に「神社明細帳」に掲載され、行政からの公認を得たことで果たされた。現在、境内に置かれた釜山神社の案内看板には、明治時代の変遷のことは触れておらず、ただ日本武尊が当地を訪れたことが、神社縁起として取り上げられている。

持田が作成した版木の大口真神が、どのような図柄であったかは不明である。しかし、それは岩根神社のものとは異なっていただろう。また、現在確認できる新田俊純筆とされるものであった可能性も高い。同じ持田鹿之助が版木作成を請け負っていても、図柄の選択権が神主にある以上、図柄が異なるようになるのは必然ではあった。

六　まとめ

護符の発行には、磯部染吉や岩松信兵衛という宗教者、持田鹿之助という職人、その他にも諸事を手助けする人々が関わっていた。持田自身も教導職についていたり、手助けする人も御嶽教や修成派の関係者が含まれていたりと、属性にはいささかのグラデーションが存在している。

また、手助けする人は、神社ごとに性格を異にしており、護符作成の中心となる宗教者の性格の差が如実に表れていた。換言すれば、岩根神社では御嶽教が、釜山神社では地縁の関係が強い。具体的には、岩根神社では秩父地方の御嶽教の中心地となっていた両神山の影響を受けた図柄、釜山神社では地縁・血縁と結びついた新田俊純ゆかりの図柄となっており、背景組織の性格がオオカミの護符の図柄にも表れているようでもある。

もし岩根神社の背景組織が地縁のみを重視していたならば、

当初のように宝登山神社に類似したデザインになっていただろうが、実際、確認できるデザインは両神山周辺のものに寄っている。デザイン変更の経緯を追えないことは残念であるが、それでも護符作成という宗教活動は、宗教者個人の営みであると同時に、それを取り巻く環境の影響は無視できないほど大きいということを指摘できるだろう。

大量の護符の発行は、宗教者が一人でできるものではなく、その背後にあるコミュニティの支えがあって、ようやくおこなうことができる。それは、護摩祈祷や神楽奉納といった他の宗教行為でも同じことがいえる。

ただその一方で宗教者の力を軽視できない。持田は、作成者の一人でありながら、岩根神社でオイヌガエがおこなわれる度に金を払ってオオカミの護符を取り換えている。あくまで持田ら協力者達が出来るのは、印刷物を作成するまでであり、それを護符とするには宗教者の祈祷（儀礼）が必要だった。持田は、自身のおこなった作業については詳細に記しているにもかかわらず、印刷物から護符に変性させるためにおこなう儀礼については詳述しない。それは、宗教者としての磯部染吉や岩松信兵衛への信頼感があったためだろう。冒頭で紹介した西海の指摘のように、護符の発行は、あくまで御師などの宗教者が主体的におこなうものなのである。

本稿では、護符作成に関連する人々を拾い上げることで、近代初めの秩父地方における宗教環境への理解を深めることができた。だが、場所や時代によって、護符作成の仕方は違ってくるだろう。近世の大社寺であれば、手助けする人の属性も変わっていただろうし、時代が下って機械印刷が主となって来れば、祭礼準備の様子が変化するだろうことは、想像にたやすい。

護符研究は、まだ端緒についたばかりである。

註

（1）清原貞雄「守札考」『郷土研究　三（四・五）』一九一五年
矢部善三『神札考』素人社書屋　一九三四年

（2）戸川安章「守札と出羽三山」『民具マンスリー　二〇（七）』神奈川大学日本常民文化研究所　一九八七年
西海賢二「守札にみる庶民信仰」『民具マンスリー　二〇（七）』神奈川大学日本常民文化研究所　一九八七年

（3）嶋津宣史「護符と神棚」千々和到／編『日本の護符文化』弘文堂　二〇一〇年　二四頁

（4）宮代町教育委員会／編『宮代町史資料　第九集　祈りの札』宮代町教育委員会　一九九六年

（5）与野市総務部市史編さん室／編『与野市史調査報告書』七　与野市　一九八五年

(6) 鳩ケ谷市文化財保護委員会／編『鳩ケ谷市の文化財　第十一集　社寺札』鳩ケ谷市教育委員会　一九八六年
(7) 飯能市郷土館／編『飯能市郷土館収蔵資料目録六　護符・版木など』飯能市郷土館　二〇一四年
(8) 北本市教育委員会／編『北本市文化財調査報告書　第一九集　北本の守り札』北本市教育委員会　二〇二〇年
(9) 徳島県立博物館／編『徳島おふだコレクション～はらいたまえきよめたまえ～』徳島県立博物館　二〇二一年
(10) 千々和到／編『日本の護符文化』弘文堂　二〇一〇年　二四頁
(11) 元興寺文化財研究所人文科学研究室／編『奈良県文化財調査報告　第三五集　吉野山有形民俗文化財調査報告書』奈良県教育委員会　一九八一年など
(12) 浦西勉「村落社会に残るオコナイ（修正会）行事の研究（一）—江戸時代のオコナイ記録から試みた郷村的オコナイ行事の復元—」『奈良県立民俗博物館研究紀要　一七』奈良県立民俗博物館　二〇〇〇年
(13) 註2戸川前掲書
(14) 註10前掲書
(15) 小倉美恵子『オオカミの護符』新潮文庫　二〇一四年
(16) 松場正敏『お犬様の御札～狼・神狗・御眷属～』（第三版）私家本　二〇一六年
(17) 飯塚好「お犬さま信仰とその周辺　秩父地方を中心として」埼玉県立博物館『埼玉県立博物館紀要　一五』埼玉県立博物館　一九八九年
(18) 西村敏也「狼信仰に関する一試論—狼信仰寺社とその由緒」『武蔵大学人文学会雑誌　四一（二）』武蔵大学人文学会　二〇一〇年　など
(19) 埼玉県立自然の博物館／編『神になったオオカミ』埼玉県立川の博物館　二〇一七年
(20) 長瀞町教育委員会／編『持田鹿之助日記　全八集』長瀞町　二〇〇一—二〇〇七年
(21) 埼玉県神社庁神社調査団／編『埼玉の神社　入間　北埼玉　秩父』埼玉県神社庁　一九八六年　四〇八—四一三頁
(22) 長沢利明・金井塚正道「岩根神社の大口真神信仰-埼玉県秩父郡長瀞町井戸」『西郊民俗　一九三』西郊民俗談話会　二〇〇五年
(23) 蘆田伊人／編『新編武蔵国風土記稿　一二巻』雄山閣　一九九六年　一二五頁
(24) 埼玉県熊谷市原島、三島神社にある御嶽塚に含まれる明治一八年八月建立「大巳貴命　少名彦命　日本武命」の石碑には祭主として磯部染吉と松本定吉の名前が並んでいる。
(25) 「釜山神社」と「釜伏神社」は、混在して使われている。『持田日記』では、「釜伏神社」との表記が多いが、本稿では現在正式名とされている「釜山神社」を使用し、資料を引用する際には、その表記に準じて記述する。
(26) 蘆田伊人／編『新編武蔵国風土記稿　一二巻』雄山閣　一九九六年　一二九頁
(27) 埼玉県／編『武蔵国郡村誌第七巻』埼玉県立図書館　一九五四年　六四頁
(28) 寄居町教育委員会町史編さん室／編『寄居町史編さん調査報告　第八集　寄居町の民俗』寄居町教育委員会　一九八二年
(29) 註27前掲書
(30) 明治二四年三月二五日「岩信方へ榛名大神ノ判、大札、小札、中符、御霊判共四ツ持、三十五銭貰ふ」とある。また、明治二七年三月二九日「判代ハ三十五銭ト定メ」とある。
(31) 東洋経済新報社／編『明治大正国勢総覧』東洋経済新報社　一九二七年　三四八頁
(32) 井上幸治／編『秩父事件史料集成　第一巻』二玄社　一九八四年

（33）埼玉県神社庁神社調査団／編『埼玉の神社　大里　北葛飾　比企』埼玉県神社庁　一九九二年　四一一頁

（34）埼玉県歴史教育者協議会／編『風布の百年：秩父事件を中心に』埼玉県歴史教育者協議会　一九七五年　一頁